

保存版

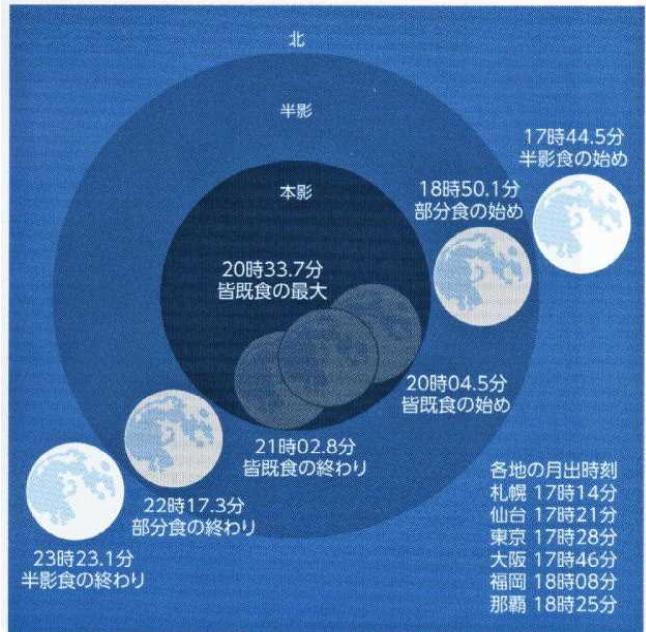
★ 2026年の主な天文現象

★ 1月7日、3月2日 レグルス食



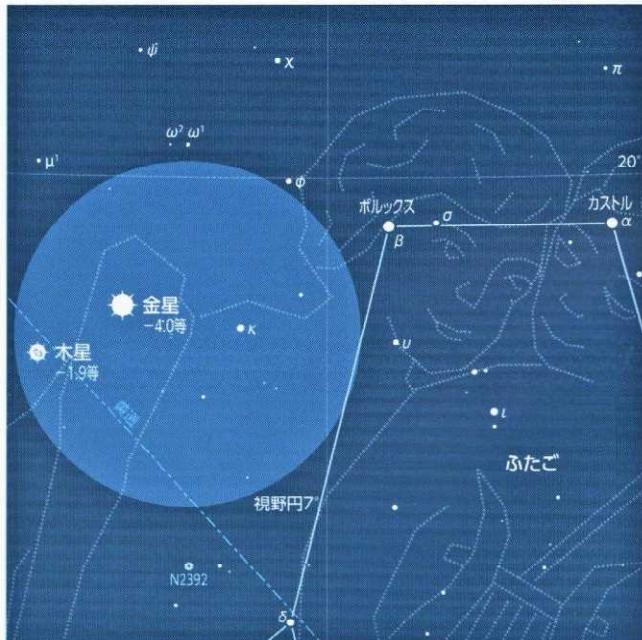
2026年にはしし座α星レグルスの食が頻繁に起こり、日本からは1月7日、3月2日、5月23日にレグルス食が見られる。1月7日の食は南中に近い月の暗縁からの出現が見やすい。3月2日の食は宵の東の空で起こるが、満月に近く、ごくわずかな暗縁に潜入することになる。5月23日の食は日中の現象だ。

★★★ 3月3日 宵空で皆既月食



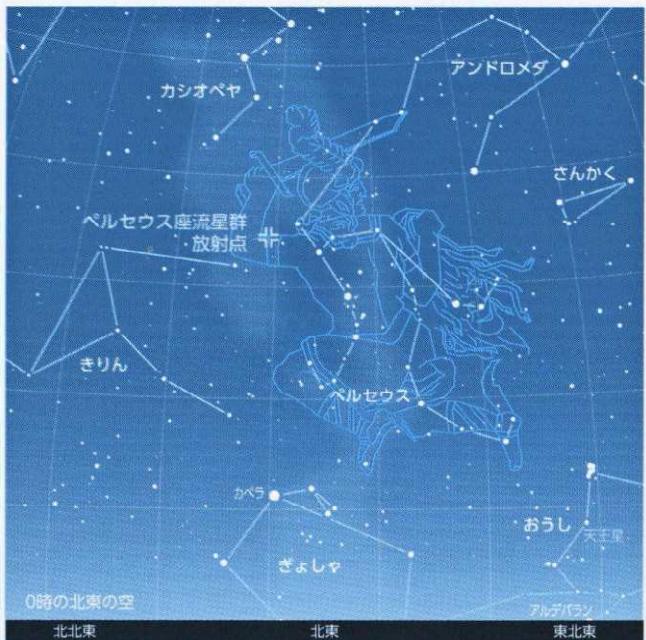
2025年9月8日の皆既月食から半年後の3月3日の宵、再び全国で皆既月食が起こる。月が昇って間もない18時50.1分に本影食が始まり、皆既食が最大となる20時33.7分の月の高度は30度前後で見やすい。最大食分は1.156で地球の影の南側を通過する。皆既中にしし座56番星(5.9等)の食が起こる。

★ 6月9日 ふたご座で金星と木星が接近



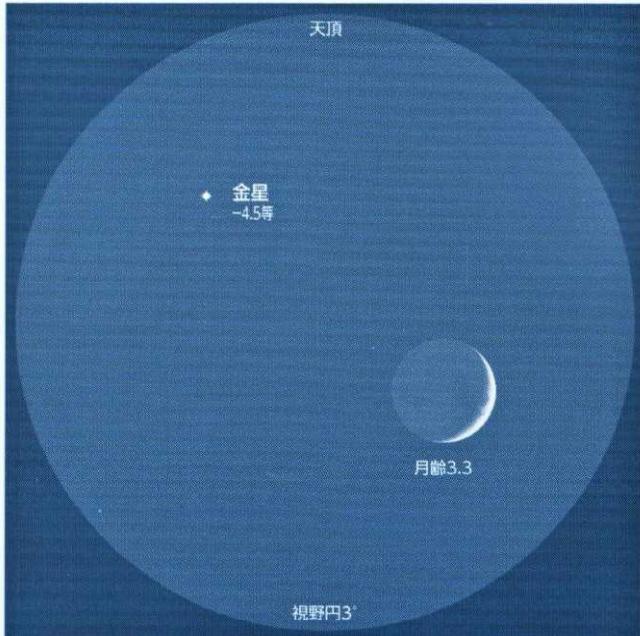
まだ薄明が残る6月上旬の宵の西の空で金星と木星が並んで輝いている。6月9日には金星と木星が1.6度まで大接近し、低倍率の望遠鏡でも同視野に見える。ふたご座のカストルとポルックスの下方には6月16日に東方最大離角となる水星も見える。夕方に見える水星としては最も条件が良いので探してみよう。

★★ 8月13日 ペルセウス座流星群が極大



三大流星群のひとつであるペルセウス座流星群が8月13日に極大を迎える。13日が新月なので月明かりがまったくない好条件だが、予想される活動のピークが13日11時で日中なのが惜しい。13日の明け方だけでなく13日の宵にも注目したい。空の暗い場所なら、数分で1個程度の頻度で流星が見られるだろう。

★9月14日 月と金星が大接近



夕方の空で高度を下げている金星が、9月14日に月齢3.3の月と約1.5度まで大接近する。9月19日に最大光度となる金星は-4.5等と明るく、日没前から三日月と並んでいるようすが見えるだろう。なお、9月9日の明け方には月齢27.1の細い月と木星が大接近し、ガリレオ衛星を従えた木星と地球照を伴う月が楽しめる。

★★12月14日 ふたご座流星群が極大



三大流星群のひとつであるふたご座流星群が12月14日に極大を迎える。極大日には月齢5の月があるが、宵のうちに沈んでしまうので月明かりの影響はほとんどない。14日23時と予想されるピーク時には放射点が高く昇り、最高の条件下で観望できる。ペルセウス座流星群を超える出現も期待できるだろう。

★2026年の天文現象の目玉は3月3日の皆既月食、夕方からの見やすい時刻に起こるので、子どもたちの観察にも好適。8月ペルセウス座流星群、12月ふたご座流星群の条件も良い。

★惑星の動き

金星 年初1月6日に外合となり、年が明けてしばらくは見えない。3月から9月までは「宵の明星」として夕方の空に見える。10月22日に内合、11月以降は「明けの明星」となる。

火星 年初の1月10日に合となり、次の接近は2027年2月20日。年間を通してじわじわ大きくなるが、小接近のため年末の視直径はようやく10''、最接近時でも約14''に過ぎない。

木星 1月10日にふたご座で衝となるため南中高度が非常に高い。一等星が多い冬の星座の中でもひときわ目立つ明るさで輝く。年初から入梅ころまでが観察好期。

土星 うお座で10月5日に衝となり、秋から冬にかけてが観望の好期。25年には環の消失現象が起きたが、26年の秋には環がかなり開いた姿となる。

★流星群

1月4日早朝 しぶんぎ座流星群がピーク

満月と重なり条件は良くない

8月12/13日 ペルセウス座流星群がピーク

新月と一致、条件は最高

12月13-15日 ふたご座流星群がピーク

月齢5前後の月は夜半前に沈み好条件

★8月19日伝統的七夕(旧暦七月七日)

★9月25日中秋の名月 ★10月23日十三夜(後の月)

★5月31日 2026年最小の満月 & 5月として2回目の満月

★12月24日 2026年最大の満月(スーパームーン)

「星ナビ2026年1月号」(AstroArts)を参考にし、図もお借りしました。

★の多さは編集子の独断による注目度を表します。

NPO法人長崎県天文協会